

KSKP

編集人 特定非営利活動法人ゆめ風基金事務局 (〒533-0033 大阪市東淀川区東中島 1-13-43-106)
TEL 06-6324-7702・FAX 06-6321-5662・郵便振替 00980-7-40043
MAIL info@yumekazek.com・WEB https://yumekazek.com/

No.
113

書
左右津安輝子

ゆめ風だより

「共に」が豊かに実るとき

理事 ^{うえの}植野 ^{かよ}加代

以前、私が勤務していた障害福祉事業所では、余暇活動として「共働田んぼ会」という集まりがあり、三重県で田んぼと古民家を借り、週末農業で稲作を行っていました。

田んぼの一部分は、手植え、手刈りと昔ながらの方法で行います。障害のある人ない人、子どもから大人まで個性豊かな面々が参加します。時には20名以上の集まりになるので、最初は村の方もその多さに驚かれたと思います。この「ごちゃ混ぜ」の集まりの様子を何となく伺っていた村の方も、活動を理解してくださった後は、地元の運動会や里山の保全活動などにもお声がけいただく間柄になりました。

田んぼ会のメンバーさんと子どもたちの関係においては、日々、生活を共にする家族や身内ではないので、思いや行動の意味などが上手く伝わらず、双方の感情がぶつかり合うことも多々ありましたが、同じ時間を過ごす中で、好きなものや苦手なものなどを理解し合い、ごく自然に良好な関係が築かれていきました。

この「ごちゃ混ぜ」の活動は、地域の理解もあり約10年続きました。みんなで楽しく稲作しよう！という小さな活動は、無意識のうちに地域を変え、子どもたちに「共に」の苗を植えました。

INDEX

- 01 巻頭言
- 03 牧口一二さんを語り合う会
- 04 能登半島地震 被災地より
- 06 リレーエッセイ 災害と障害者 第八十六回
- 08 BCP 研究会主催避難所一泊に参加して

- 09 応援団からこんにちわ! vol.15
- 10 カンパをいただいた団体 / 事務局の動き
- 11 会計報告
- 12 各地からの風だより

「いのちと防災を考える ゆめ風中学生プロジェクト」についてお話しします。

これは、前代表の牧口一二さんの提案で2006年から始まった取り組みで、身体・知的・盲ろうの障害者が中学校を訪問し一緒に避難訓練を行うというもので、大阪府内で毎年行っています。

体験後の感想には「障がいを持った方は不自由な部分があるだけで『障害者』といって区別される今の社会のあり方に疑問を持ち、考えるきっかけとなりました」のように、限られた時間の中でさまざまなことを感じ取っているのが伝わります。

先日、ある障害者団体の全国大会に参加しました。その中の分科会「共に学ぶ」の登壇者の報告には「共に」の思いが溢れていました。

彼女は、出生時の事故で脳性麻痺になりました。現在は一人暮らしをしながら大学院に通っています。

小・中学校は地元の学校に通い、自然な人間関係の中で過ごし、高校進学に際しては、支援学校を勧められ、見学に行った高校では「合理的配慮はわがまま」などと言われて入学を断られ、

やむを得ず支援学校へと進学しました。

支援学校に入学後の彼女は「共に」の機会を奪われ、分離されたことにより社会から排除されたと感じました。と同時に健常者を優位な立場だと思わされてしまい、それまで当たり前のようにできていた「共に」ができなくなると、当時の心情を吐露し、「共に学ぶ権利」が保障されることで「共に生きる社会」が実現できると、自身の経験を通し分離教育を問い直していきたくと締めくくられていました。

牧口さんの著書『雨上がりのギンヤンマたち』は、小学校で行った講演の様子がまとめられ、子どもらしい付度ない質問や言葉であふれています。牧口さんはそれらの質問などに対し、自身の体験を通して物事の見方や捉え方「共に」を伝えていきます。

この書の後半には、子どもたちから届いた手紙が紹介されていて、障害者への同情を率直に記したものもあります。「こういう気持ちは、いつ、どこで、どんな機会に、誰の、どの様な言葉や態度から仕入れてしまったのか。人間はそもそも不完全なもの、未完成なもの。障がい者といくら言葉を変えても、

社会の『障害者』観が変わらなければ意味はない』『かわいそう』や『同情』は二つの分かれ道の分岐点のようです。一方は共生への道、一方は差別への道」と牧口さんは綴られていました。

日本では、障害のある子どもは別の場で別の教育を受けることを前提とした教育システムを構築してきました。私もこの教育を受けてきた一人で「分ける」ということは差別だと感じることなく育ってきました。しかしその一方で「差別はダメ」「共に生きる」という正反対の教育を受けてきました。

多様化の現代。世の中には障害や病気の有無、宗教、性別、国籍や人種といった、様々な違いや課題であふれています。この様な大人が作り上げた複雑な社会状況の中で、子どもたちが育つ環境も年々変化しています。

この先の未来は、今の子どもたちが担っていくます。さまざまな違いがありながらも互いの違いを認め合い、地域の中であたりまえに過ごし成長していく。「共に」の想いが根付き、豊かに実るよう、ゆめ風の活動を通し伝えていきたいと思っています。

牧ローニさんを語り合う会 開催 バトンは次の世代へ

こばやし としあき
理事 小林 敏昭

猛暑が続く大阪で8月18日、全国から200人が参加して昨年9月に亡くなった牧ローニさん（前代表理事）を「語り合う会」が開かれた。

冒頭、牧口さんの等身大パネルの横で尾上浩二実行委員長（DPI 日本会議）が彼の足跡を紹介したあと、親交のあった人たちが思い出を語った。研究者の北野誠一さんと堀智晴さんからは障害者問題論の講師として学生たちを魅了した彼の語りや、当時“過激”と言われた青い芝の会とのつながりが紹介された。長い付き合いだった友人の岩永清滋さんは、街のバリアフリーに尽力した彼を偲んで『帰って来たヨッパライ』の替え歌を披露し会場の笑いを誘った。「♪マキさん死んじまったダ 天国に行ったダ 雲の階段を のぼって行くので 作らなアカンなエレベーター……」。遺族（姉）の浦地恭子さんから子どものころの家族とのエピソードが語られ、それが牧口さんのその後の他者に対する姿勢に影響したことをうかがい知ることができた。

続くパネルディスカッションは早瀬昇さん（大阪ボランティア協会）の司会で、尾上さん、輿那嶺司さん（おおさか行動する障害者応援センター）、松森俊尚さん（学校のあたりまえを問い直す会）、橘高千秋さん（ゆめ風基金）、そして私

が壇上に並んだ。細かく紹介する余裕はないが、牧口さんの生きるスタイルや大切にしていた考え方について、具体的な事例をあげながら話し合った。彼が障害者権利条約の言う「合理的配慮」の「合理性」や「配慮」を問題にしたこと、人間の弱さや矛盾に自覚的で、だからつながり合うことの大切さをよく知っていたことなどの指摘があった。

昼の部の最後はゆめ風のイベントでいつもご協力いただいている小室等さんとこむろゆいさんのライブ。総司会を務めた平下耕三さん（自立生活夢宙センター）のリクエストに応えた『国境のアゼルバイジャン・コニャック』では会場のあちこちから手拍子が起こった。夜の懇親会では、会場に持ち込んだ缶ビールの撤去を余儀なくされるハプニングもあったが、タテの権威主義を嫌いヨコの自由な関係を大切にした牧口さんのスタイルそのままの、和やかで愉快的集いとなった。牧口さん、素敵なお土産をありがとう。そして、さようなら。



能登半島地震 被災地より

支援終了は

「たいへん困る」「困る」が95%



おおの たけし
大野 健志
日本障害フォーラム(JDF)
能登半島地震支援センター
スタッフマネージャー

きょうさん「能登半島地震」災害対策
本部・事務局長
社会福祉法人さくらんぼの会・理事

2024年5月から、七尾市和倉町に日本障害フォーラム(JDF) 能登半島地震支援センターを立ち上げ、誰一人置き去りにしないために、支援活動を続けてきました。当初25年3月末を支援の節目と考えていましたが、24

年9月の奥能登豪雨を受け、25年9月末まで支援を延長し、さらに26年3月末まで再延長となりました。

再延長する前に、計24件(個別支援14件、事業所支援7件、コーディネーター3件)からアンケート調査の回答を得ました。

「個別支援」「事業所支援」「コーディネーター」でJDFの支援活動について「9月末の終了について」の問いに対して、回答のあった24件中、19件(79・1%)が「たいへん困る」、4件が「困る」(16・6%)、1件(4・1%)が「大丈夫」と回答がありました。「た

いへん困る」「困る」で23件(95・8%)となりました。

なぜ、「たいへん困る」のか、理由について聞いてみると「JDFの移動支援がないと、バスの本数も少なく、バスを何度も使ったり、タクシーなどを使ったりすると交通費が高くなる。通院する距離もある」「職員不足で、送迎がまわらない。撤退してしまうとJDFにお願いしている分ができない」「人員不足で稼働できている事業もギリギリの人員で行っているが、JDFのおかげで職員の日々の仕事

が分散でき、負担も軽減されている」「現在JDFで行っている移動の支援に関して、今後奥能登地域でJDFに代って、どのような取り組みを行ったらいいか、検討がなされていないため、検討し、実行していく仕組みづくりに時間がかかると思う」といった声が上が

られました。そして、「国、石川県などに伝えたいこと」として、「JDFに担って頂いている配慮が細かく行き渡る支援について、自治体や事業所等、受け皿となっていく体制づくり、役割の再確認が必要」「事業所としても柔軟に支援をいたくとも、経営維持のために、最低限の支援しかできない現状にある。地元自治体独自の仕組みや資源を考えていく必要がある」といった声も届きました。

現在、JDFは、ゆめ風基金、難民を助ける会(AAR Japan)と連携し、石川県担当課とも定期的な懇談を持ちながら、障害のある人の被災地での生きづらさの現状を伝え、どのようにに地域の中で、あたりまえのくらしを実現できるのか話し合いを重ねています。

被災地視察の方々と（新たに開設したイベントホールにて）



能登半島地震を経験して思う 被災地の地元企業の役割

震災が発生した令和6年の元日は、

輪島市から150km離れた白山市に
いました。能登が大変な状況になった
と聞き、3日には物資を買い集め能登
へ向かいました。多くの方が避難して、
余震も続くなか、地域の方へ物資を配
布。1人で瓦礫の片づけを始めました。
事業所がある輪島市南志見地区は、
周辺の山が崩れ、接続する道路が全て

寸断され孤立。強
制集団避難が実施
されました。多く
の建物が壊れた
り、傾いたり、屋
根がずり落ちた
り。700名ほ
どいた住民も半減
しました。さらに、
9月に発生した豪
雨でも大きな被害
も受け、8割の建

物を解体すると言われています。

地震直後はもう能登での事業は無理
だと思いましたが、この地域を残すた
めにもここでの事業を諦めてはいけな
いと決意しました。行政から見放され
ない地域にするために、事業を増やし、
人が戻ってこれる地域をつくる。それ
を築くのが地元企業の役割です。

2月には避難した職員と利用者の仕
事をつくるため、金沢でサテライトの
作業所を開設。同月末には南志見地区
のカフェを再開。5月には能登に残っ
た利用者へ在宅の仕事を提供。8月末
にはカフェ、ゲストハウス、就労施
設、能登ヒバの蒸留所の修復を完成さ
せ本格的に事業を再開。その後、県内
外から多くの方が視察に訪れ、受け入
れるためのイベントホールを開設しま
した。

もともと、奥能登には私たちが立ち
上げるまで就労移行支援の事業所があ



おくた かずや
奥田 和也
〔輪島市〕
（株）奥能登元氣
プロジェクト代表

昭和46年生。建築会社に就職後、金沢・白
山市で建設・障がい・児童福祉などの事業
を起業。

平成31年には輪島市で（株）奥能登元氣プロ
ジェクトを創業。就労移行支援事業所「奥能
登WORKSスタジオ」を設立。

りませんでした。それは奥能登での仕
事がなかったからだと思います。でも働き
手は足りない。働きたい障がい者もい
る。障がい者の働ける環境を提供する
ことは私たちの使命です。それは過疎
地であろうと、被災地であろうと変わ
りません。そんな思いで立ち上げまし
た。

いまは事業安定化と利用者へのサー
ビスの質と工賃の向上に取り組んでい
ます。そのためには、能登や南志見
そして私たちのファンを増やす必要が
あります。能登に来て、泊って、おい
しいものを食べて、地域の方と交流を
促すことが欠かせません。

いまの能登は過疎地の復興の最先端
です。災害に遭っても事業を継続する
ためにどう動くべきか、どう考えるべ
きかを学べる場所です。興味のある方
はぜひ一度能登にお越しください。

リレー・エッセイ 災害と障害者 第八十六回

避難所をファーストクラスに

誰もが生きること

大切にできる地域社会へ

障害者防災についてイベントなどでわかりやすく課題を知ってもらうために、最近「障害者防災かるた」を作ってみようということで、考えてみた時に一番に頭に浮かんだのが「にげおくれ『おきのどく』ではすまない いのち」という文言でした。正にこれこそが活動を始めた動機であり、健常者ばかりではなく障害者も同じ地域社会で生活しているという認識を防災対策でも浸透させたいと思っています。

近年ではコロナ禍も災害の一つとして捉え、京都府・市に2020年～23年までコロナ治療の現場で「障害者の命の価値に差を付けられないよう」障害者対応や支援者の待遇改善について、毎年1回（計4回）要望書を提出してきました。その一環で22年と24年には府市との対面懇談の機会を持ち、特に24年度には福祉避難所開設について役所としての進捗状況を担当者に確認したのですが、「福祉避難所開設をお願いしている福祉事業所には、エアコンと車椅子用トイレ使用ができるであろう事を期待しているのみで、廊下でもどこでも良いので何名かが横に

しげともこ
繁朋子

障害者防災会議（代表 繁周作）は京都で発足し、「障害者が災害時にも生き延びられる社会に」をテーマに2016年より活動が続けています。障害者ならではの視点を大切に必要ことを主張することでインクルーシブな社会へと変革したいです。

込み、本来は屋内用ですが屋外イベントのためその時は野外に設置し、中にダンボールベッド・エアマツト・ポータブル電源などを備え、来場者の方々に居心地を確かめていただいたのが本格的な活動の皮切りでした。その日は風もあったので皆「こんなのあったら温かいね」とか「落ち着くね」とかの感想をいただいたのを憶えています。

その後、地元京都で3月「福祉まつり」や4月「東九条春まつり」、5月「向島につこりフェスティバル」に参加し、2m×2mのハウス内に設置するグッズもバージョンアップして、カーペットや折りたたみ電動リクライニングベッド・エアマット・ポータブル電源・折りたたみ椅子・テーブル・電気ポット・お茶セット・荷物整理ワゴン・ゴミ箱・簡易トイレを揃え、来場者の方々に正に「ファーストクラスの避難所体験」をしていただいています。

この企画は当会メンバーの頸髄損傷の障害をもつ方々の発案でやり始め、最初は「実際の避難所で実現できるか？」と少し不安も感じたのですが、「寝

なれるスペースがあればありがたいという依頼をしている」という、驚くほど丸投げでお粗末な返答しか返ってきませんでした。

また自立支援協議会主催の防災部会の研修会で、台風被災経験のある静岡の事業所さんのお話を伺った際に、その事業所さんは災害時の職員連携など非常によく準備をされてBCPへの意識も高かったのですが、「福祉避難所として何ができるか?と考えると、良くできて部屋を一室お貸しできるぐらいが精一杯で、介護する職員も出せないのが現状です」とおっしゃっており、通常の利用者さんへの対応で手一杯の現状では、むしろ誠実にお話をしてくださったと受け止めました。

このような現状ではたとえ福祉避難所でも体調悪化（悪くすれば関連死）の危険から逃れられないと知り、当会では我慢が強いられ命をすり減らすのではなく、指定避難所の環境改善をめざし、体調を整え復興に向け体力や気力を回復できるような避難所とはどういうものかを考え、体験してもらうために『避難所をファーストクラスに』という防災グッズプレゼンテーションの取り組みを始めました。

昨年11月に大阪・長居公園で開催された「童夢KANSAIフェスティバル」に参加させていだいた際に、名古屋工業大学の北川啓介研究室が発明されたダンボール製のインスタントハウスを持ち

具が身体に合わないと褥瘡じよくそうができやすく、それが致命的な体調悪化につながりやすい障害者にとって、自分たちが使えない環境を要求しても意味がない」と感じるようになりました。根本的に避難所環境を変えるよう声を挙げていくことで障害者だけではなく、多様な人々にとっても過ごしやすい場にしていきたいと思っています。

時を同じくして3月に、「避難所・避難生活学会」代表理事の水谷嘉浩さん（2020年にBCP研究会で「イタリアの避難所」について講演してくださいました）らがイタリア式避難所設営TKB48（発災から48時間以内にトイレ・キッチン・ベッドを完備する）を導入する実証実験を長野で実施されたり、横浜市がTKB48の試験的導入を決定したりと、私たちの背中を押してくれる風向きを感じて大いに勇気づけられています。



上：ダンボールハウス内装／下：ダンボールハウス外装

BCP研究会主催 避難所一泊体験に参加して



かこ ゆういち
加古 雄一

〔京都市〕

先日、BCP研究会主催の避難所一泊体験に参加してきました。避難所体験では、部分的でも災害避難所で即座に起こるだろうということを身をもって感じました。私は電動車いすを利用し、呼吸器や加湿器を稼働させ、胃ろうによる経管栄養や薬の管理も必要です。現在自分で用意してあるバッテリーでは呼吸器24時間と呼吸器加湿器24時間しか稼働させられず、災害時に必要物資が入手できるまでの約3日72時間を満たすことはできません。バッテリー購入の助成制度も金額が不足しており、自己負担で対応するには限界があります。このままでは、災害時に障害者の命が確実に軽視され、取り返しのつかない事態が起こる可能性が極めて高いと強く危惧します。

重度障害者は一般以上の支援、十分な広さ、必要な物品や環境整備が想像以上に必要であり、移動や排泄、清潔保持には多くの時間と人手がかかりますし、医療的ケアが必要な場合も多い

です。こういった最低限の環境が整わなければ命に直結します。この体験では、避難所と同じ段ボール製のパーティションを立てて広さや使い勝手を確認しましたが、2m×2mの広さでは、寝る着替えトイレする等の生活行為に多くの福祉用具や複数人の同時介助を使う重度障害者では何もできません。そのような重度障害者向けの福祉避難所というものがありますが、私の住む京都市は必要な具体的措置をほとんど講じていませんので、現状の行政対応は不十分で、障害者の命や尊厳が後回しにされていると感じざるを得ません。過去の災害でも同様の問題が繰り返されており、放置すればまた同じ悲劇が起こります。

行政には即座に実効性のある施策を講じることを強く求めます。福祉避難所の即時開設と確実な運用、非常電源や温湯設備の常備、大容量バッテリー助成の拡充、介護・医療職員の常時配置など、命を守るために必要な措置を直ちに整えてください。海外の好事例も参考にし、過去の失敗を繰り返さないことは最低限の責任です。

個人の努力だけでは限界があり、行政の迅速かつ確実な対応なしには、多くの命が守られません。費用がかかることを理由に先送りする余地は一切ありません。今この瞬間も障害者の命は危険にさらされているのです。同時に個人や市民としての備えも不可欠です。大容量バッテリーや非常用電源、栄養剤や加湿器具の備蓄、地域での助け合い体制の構築は、行政支援が届くまでの命綱になります。

重度障害当事者の声を社会に広げ、行政に具体的に迅速な施策を求めることは、誰もが安心して避難できて誰一人取り残されない社会を実現する為の大きな道筋です。私自身重度の障害者であることを強みにして、「私が救われる仕組みはすべての人が救われる仕組み」であるのだと心に強く刻み、弱気になる時もその強く刻んだ思いを頼りにして、個人の備えと声を上げる行動、そして行政の責任ある対応、この両方が不可欠であり、行動の遅れはすぐに命の危機につながることを、周りの人たちと思いを繋げて強く訴えたいと思います。



東京都豊島区

有限会社オフィス泰
代表取締役 窪 孝泰
くぼ たかやす

ゆめ風基金さんとは前職の印刷会社に勤務していた際、障害者問題資料センターの小林さんよりご紹介頂いたご縁で接点ができました。以来、20年近くお付き合いさせて頂き、現在は弊社にて「ゆめごよみ風だより」の印刷のお手伝いをさせて頂いております。

事務局長の八幡さんからのお誘いで「ゆめ風応援団」の一員として参加させて頂きましたが、お恥ずかしながら名ばかりの団員でした。

転換期となりましたのが、今年の元旦に発災した「能登半島地震」です。私の祖父母が石川県出身で祖父は被災地である輪島市町野町の出身で、当然ながら私にとっても思い出の地でもあります。

親戚縁者に人的被害はなく日々の報道も減少傾向にあり、どこことなく通常の生活に戻りつつある中、今年の「第19回ゆめ風であいましょう」に参加させて頂いた際、東京新聞の望月衣塑子記者のお話や、「大震災後、私たちはこう生きてきた」を拝読し報道では伝えてられない事実を知り、悲しみ・憤り等何とも言えない感情になったのを覚えています。

まだまだイベントへの参加や少額の寄付等、名ばかりの団員ではありますが、ゆめ風基金さん、応援団の皆さんとつながる事が出来、何らかの活動が出来ればと願っております。

今後とも宜しくお願いします。

応援団からこんにちは！

vol.15

災害時にはより小さな地域単位、「町」や「村」での情報収集が必要になってきます。そこで、いざ、災害が発生したときに「地域単位」で情報収集してくださる団体を募集することになりました。それが「ゆめ風応援団」です。



岩手県下閉伊郡

特定非営利活動法人ハックの家
副理事長 竹下 敦子
たけした あつこ

東日本大震災当日、私たちは海辺の水産加工場で仕事をしていました。いつもより仕事が早く終わり三陸鉄道島越駅で待つより、一度海からだいぶ離れた事業所へ移動することにしました。直後大きな地震、ライフラインがストップし訳も分からず一夜を過ごしました。数日後目にした駅の惨状に言葉にならない思いをしたことを今でも鮮明に覚えています。

当時私たちのできることは、少しでもホッとできる場所の提供がやっとでした。そんな中で徐々に困っていった大きな課題が移動手段です。そんな困ったに「ゆめ風基金」さんが手を差し伸べてくれました。田野畑村と言っても岩手県民以外でわかる人がほとんどいないであろう地域への支援を可能にしたのは、思いだけではない確かな活動からくるものなのだと実感し「私たちはまだまだ大丈夫」と思わせてくれました。

小さな声に耳を傾け困っているときはお互い様の気持ちで助け合い、小さな実践を積み重ね、何かあったら自分たちのできることを肅々と、そんな小さな活動が風によって届いたらいいなと感じています。私たちは毎日、田野畑村で障がい者の皆さんと織物をしパンを作り生活しています。近くにきたら是非お立ち寄りください！

2025/7-9

カンパをいただいた団体

お店に募金箱を置いてくださったり、街頭募金やバザー、イベントで集めてくださったりしています。本当にありがとうございます。もしも記載漏れがありましたらご連絡ください。

7/8	TOLI 協会（世田谷区）	9/18	百合の樹（横浜市）
7/10	めかぶの会（練馬区）		黒川こころの応援団（黒川郡）
7/16	ステップワン（伊勢市）	9/22	いーはとーぶ（さいたま市）
7/18	黒川こころの応援団（黒川郡）		センターあゆみ（安芸郡）
8/18	黒川こころの応援団（黒川郡）	9/24	野村福祉園（西予市）
8/19	点字サークル・ライト（高松市）	9/27	三秀会（大阪市）
8/26	みのおチャリティーコンサート 2025（箕面市）	9/29	牧口一ニさんを語り合う会（大阪市）
8/28	有限会社エフ エム ジー（港区）	9/30	ほのぼの（明石市）
8/29	センター 123（大船渡市）		合同会社 uranaisu（福岡市）
9/8	草の実家族会（札幌市）		

2025 年 1 月から 12 月までに寄付をいただいた方には、
2026 年 1 月に発行される臨時号に領収書を同封させていただきます。

事務局のうごき

2025 年 7 月から 9 月の動きを一部ご紹介します。

毎週（曜日不定）：事務局会議 | 毎週金曜日：新 HP 打ち合せ ※ BCP（事業継続計画）

7/1	能登半島支援会議	8/20・21	能登訪問（八幡）
	おおさか災害支援ネットワーク（OSN）世話役会議	8/27	徳島市人権教育・啓発推進協議会講演
7/2	大阪府災害対策本部事務局運営訓練参加		改正災害対策基本法学習会
	BCP 研究会	8/30・31	避難所体験一泊訓練
7/3	日本障害フォーラム（JDF）能登報告会	9/1	NPO 法人いきいき（穴水町）支援会議
7/8～11	能登訪問（植野）	9/2	JDF 能登報告会、鳥取市人権情報センター講演
7/11	茨木市福祉事業所連絡会講演	9/3	大阪府災害支援活動連携会議
7/15	夢かぼちゃ（輪島市）移動支援継続会議	9/4	通信 112 号編集会議、理事会
7/17	奥能登ワークス（輪島市）支援会議	9/8・9	通信 112 号発送作業
7/18	理事会	9/9	能登半島支援会議
7/19	箕面チャリティーコンサート	9/10	BCP 研究会
7/24	通信 112 号編集会議	9/13	CIL いわき講演
7/28	OSN 定例会	9/16	児童ホームあだぶと（穴水町）支援会議
7/30	童夢 KANSAI 実行委員会	9/20	（社福）ゆうとおん（大東市）講演
7/31	多賀町人権教育推進協議会連絡協議会講演	9/28～10/1	能登訪問（永村、植野）
8/1	JDF 能登報告会、OSN 世話役会議	9/29	夢かぼちゃ移動支援継続会議
8/5	通信 112 号編集会議、能登半島支援会議		JDF 支援検討調整会議
8/6～9	能登訪問（八幡）		
8/18	奥能登地域自立支援協議会		
	牧口一ニさんを語り合う会		

NPO 法人 ゆめ風基金

会計報告

ただいまの基金額
295,866,438円

貸付金の残高
0円
これまでの救援金・救援活動費総額
692,723,502円
総会員数
13,677人

			前回報告残高	この3ヶ月の動き 7月から9月まで	今回報告残高 2025年9月現在
収支計算書	収入の部	会費収入	5,226,396	2,593,000	7,819,396
		寄付金収入	28,625,762	5,484,852	34,110,614
		臨時寄付金収入	1,731,053	54,945	1,785,998
		助成金収入	248,625	0	248,625
		事業収入	946,517	403,230	1,349,747
		雑収入	71,090	73,785	144,875
		貸付金返済収入	0	0	0
		保証金返済収入	0	0	0
		預り金収入	969,289	439,532	1,408,821
		未収入金収入	217,000	0	217,000
		未払金収入	0	0	0
		合計	38,035,732	9,049,344	47,085,076
	支出の部	救援金支出	22,578,010	16,692,261	39,270,271
		救援活動支出	797,674	2,173,152	2,970,826
		貸付金支出	0	0	0
		基金拡大活動支出	1,132,999	165,978	1,298,977
		防災活動事業支出	403,930	131,200	535,130
		広報活動事業支出	1,247,458	507,135	1,754,593
		その他事業支出	371,440	105,280	476,720
		人件費支出	6,804,193	3,071,904	9,876,097
		その他事務費支出	2,970,249	1,130,932	4,101,181
		預り金支出	901,540	572,597	1,474,137
		未払金支出	292,920	0	292,920
		固定資産購入支出	0	0	0
		保証金支出	0	0	0
		合計	37,500,413	24,550,439	62,050,852
		差引：収支差額	535,319	△15,501,095	△14,965,776
貸借対照表	資産の部	基金特別会計預金	317,448,126	△21,581,688	295,866,438
		一般会計現金預金	7,403,611	6,080,593	13,484,204
		[現金預金合計]	324,851,737	△15,501,095	309,350,642
		障害者貸付金	0	0	0
		有形固定資産	202,489	0	202,489
		その他の資産	1,132,449	0	1,132,449
		合計	326,186,675	△15,501,095	310,685,580
	負債の部	未払金	0	0	0
		預り金	306,579	△133,065	173,514
		その他の負債	0	0	0
		合計	306,579	△133,065	173,514
		差引：正味財産	325,880,096	△15,368,030	310,512,066

脚注 1. 今回は7月から9月までの3ヶ月間の報告です。
2. 救援金は10件の支払いがありました。
3. 能登の現地視察等により、救援活動費が増加しています。
4. その他は特に大きい変動はありません。

災害別の救援金総額 以前に他の災害でお届けした救援金はゆめ風 WEB サイトとブログに掲載しています

東日本大震災	2016 年熊本地震	2018 年西日本豪雨	2024 年能登半島地震
350,427,104 円	55,598,387 円	45,164,095 円	102,894,375 円

2025年もあたたかいご支援、本当にありがとうございました

そよ風、つむじ風、六甲おろし

各地からの風だより

2025.7-9

▼あつたはずの備蓄米、物価高、世界に戦火が絶えない毎日：庶民はすべき事をコツコツ続けるほかありません。ゆめ風さんを見習って（大阪市）▼思い出したように行う少額の寄付です。大河の一滴になれば幸いです（熊本市）▼地震が続いています。被災された方にちゃんと再建できるような予算を組む政府であってほしい（寝屋川市）▼各地で活動されている方々の生の声、背筋を正して拝見しています（秦野市）▼今はこんなにもたくさんの方々の歴史書があるのに、戦争が愚かだと学習しないことに怒りを感じるどころか、脱力感が漂っています（小松島市）▼年明けから雨だ風だと自然災害が続きますね。止められないだけに困ったものです。（横浜市）▼被災地の方々、一日も早く安全に過ごせますように（仙台市）▼毎年毎年、これでもかというほど各地で豪雨の被害、地震に津波に酷暑に、本当にみんなでこの地球をどうにかしたいかと思うます。わずかですがお役立て下さい（八王子市）▼共に生きる（小田原市）▼今、すぐ必要な所へすみやかに届けてくださり、思いが伝わっている事がよくわかります。これからも素早い対応で、困っている人達によりそって下さい。元気でいられているうちは応援します（松本市）▼会報を読むたび人とのつながりの大切さ、自ら積極的に行動する必要がある（奈良市）▼大病後10年たちました。

日々おだやかであることに感謝しながら少しですが（三原市）▼「ゆめごよみ風だより」を読むことで人間の善意を実感しとても励まされる思いが致します（横浜市）▼災害大国日本実感です。皆で助け合って生きていきましよう（荒川区）▼だれもが、納得して日々の生活を維持できますようにあります（高槻市）▼能登の復興が早く進みますように（高石市）▼どこでも、いつでも言います。「世界平和」（倉敷市）▼物価の値上げ。年金との乖離。増々生活は苦しい、苦しい。被災者はもともとと苦しい。ゆめごよみ風だよりは楽しい（清水区）▼少しの年金より少しの寄付です（熊手郡）▼「隣人へのやさしさ」が後退してゆく今の社会で、ゆめ風のマインドを風化させてはならないですね（川崎市）▼各地で起こる自然災害に胸が痛みます。防災にも基金が使われるといいなと思います（綾歌郡）▼平和を！（尾道市）▼おひとりおひとりが、心おだやかにすごせますように（日野市）▼亡き夫の気持ちを継いで少しづつでも応援します（札幌市）▼心ばかりですがいしょにがんばりましょう（小牧市）▼本当に日本は災害列島ですね。辛いです。能登の声を届けていただき有難いです。能登出身者です（松戸市）▼正義とは何だろう？ 正しい行いとは？ 世界は難しい、いや、人間社会だけが自分たちで難しくしている。（小松島市）

ゆめ風ブログ（<https://yumekazek.com/blog/>）にも掲載しています

編集後記 ▷今年も大変お世話になりました。防災にも基金をとの声をいただきました。ゆめ風は、防災活動として「避難所体験の取り組みや、防災ネットワーク活動、学習会、全国の障害者防災活動への助成」を行なっています。▷能登は復興住宅も未だ建設されず厳しい状況が続き、ガザ地区は停戦と言いながらも空爆が止んでいません。来年は少しでもみんなが平和に暮らせることを祈ります。（Y）

ゆめ風基金のSNS やウェブサイト

Facebook
yumekazefundYouTube
@user-jt6wo9lk8qInstagram
yumekazekWebsite
yumekazek.com